

日本道教學會第七十回大會案内

拜啓 初秋の候 ますますご清祥のことと拜察申しあげます。
本學會第七十回大會を來たる十一月九日（土）に早稲田大學戸山キャンパス
において開催いたしますので、ご参加くださいますようご案内申しあげます。

敬具

令和元年九月二十日

日本道教學會 會長 丸山 宏
第七十回大會準備委員長 森 由利亞

會員各位

日程表

日	時間	行事	会場
8日 (金)	15:00-16:30	全国理事会	33号館16階第10会議室
	16:30-17:30	合同役員會	33号館16階第10会議室
9日 (土)	9:30-	受付開始	38号館2階AV教室
	10:00-10:10	開會式	38号館2階AV教室
	10:10-12:10	研究發表	38号館2階AV教室
	12:10-13:15	晝食	38号館2階AV教室
	13:15-14:15	研究發表	38号館2階AV教室
	14:30-16:00	講演	38号館2階AV教室
	16:15-17:30	總會	38号館2階AV教室
	18:00-20:00	懇親會	早稻田キャンパス 26号館 15階 「森の風」

■ 會費

- ・大會參加費 3,000 圓
- ・弁當代（8日夕食，役員のみ） 2,000 圓
（9日晝食） 1,000 圓
- ・懇親會費 6,000 圓（學生 4000 圓）

- ・研究發表会場は、禁煙です。喫煙は所定の場所でお願ひします。
- ・晝食は、學内の食堂、コンビニエンスストアもご利用になれますが、弁當をあらかじめお申し込みいただくのがより確實です。
- ・構内に駐車場はありませんので、お車でのご來場はご遠慮ください。
- ・懇親會時は手荷物を懇親會場にてお預かりいたします。

御出席のお知らせについて

同封の「払込取扱票」に必要な事項を御記入の上、會費とともに郵便局にお出し下さい。それを以て御出席のお届けとして扱わせていただきます。

第七十回大會準備委員會

お問い合わせ…メール moriyuri@waseda.jp (森 由利亞)

大會準備委員會電話…〇三・五二八六・三七〇一 (早稻田大學東洋哲學研究室)

第七十回大會日程次第（十一月九日 土曜日）

午前の部（午前十時～十二時十分）

開會式

研究發表

「秦人不得眞道」考——漢墓畫像に見る漢代儒家思想史

姜 生（四川大學）

洪恩靈濟眞君の祭祀と儀禮書

酒井 規史（慶應義塾大學）

明代の「修心」養生思想について——朱權『活人心』を中心にして

劉 青（京都大學大學院）
司會 松本浩一（筑波大學名誉教授）

伍守陽の著作活動と内丹法について——『仙佛合宗語録』を中心にして

吉澤 明希（早稲田大學大學院）
司會 横手 裕（東京大學）

司會 加藤千恵（立教大學）

休憩（十二時十分～午後一時十五分）

午後の部（午後一時十五分～四時）

比較宗教學と道教…モデル形式と宗教類型

テリー・クリーマン（コロラド大學）

司會 山田利明（東洋大學名誉教授）

蝕の理論と道教の煉丹術——陳致虚の内丹思想再考

野村 英登（法政大學）

司會 山田俊（熊本縣立大學）

休憩（午後二時十五分～二時三十分）

第七十回日本道教學會大會記念講演

道教の天律・降筆・善書の儀禮的基盤

ヴァンサン・ゴサール（フランス高等研究院）

司會 森由利亞（早稻田大學）

休憩（午後四時～四時十五分）

總會（午後四時十五分～五時三十分）

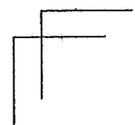
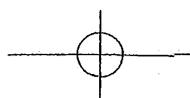
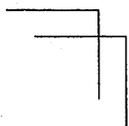
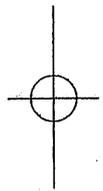
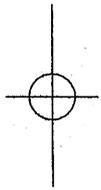
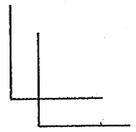
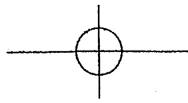
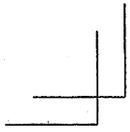
懇親會（午後六時～八時）

研究發表要旨

「秦人不得眞道」考——漢墓畫像に見る漢代儒家思想史

姜 生（四川大學）

漢墓畫像と早期道教經典とはそれぞれ異なる様式によって漢代思想史資料を保存し、漢儒の歴史観をその内に包含している。「褒貶を寓し、善惡を別す」という春秋の筆法は漢墓畫像の中に體現され、そのなかには秦朝および秦始皇に對する批判もまた見えるのである。道教文獻と漢墓畫像とが相互に證明しあうかのように、曹魏後期に出現した『正一法文天師教戒科經・大道家令戒』と大量の漢墓畫像とは、それぞれに兩漢の儒生信仰における儒家思想、特に『春秋』史觀に基づいて行つた歴史人物批判と、「先死後蛻」の尸解信仰に基づいて古人の行爲に對して下された褒貶や陟黜の迹とが保存されている。始皇帝および彼が代表する秦朝は、漢儒による強烈な排斥、抹殺的ともいふべき行爲を受けた。道教經典に保存される「秦人は眞道を得ず」という言説は、漢儒の論を體したものであるが、その意圖は、上記のような理解を俟つてはじめて合理的に解釋でき、漢代畫像資料の敘事の構成もまたこれによって合理的な解讀と、傳世文獻の構成と相互に補完しあうような解釋とが可能になるのである。このような觀點から見ると、漢代畫像資料は、歴史理解からしても、もしくは史實としては知りようのない方面からしても、等しく漢代思想史を補う面がある。ただ、墓葬に施されたものなので、宗教的な言説へと轉化させられており、宗教學と歴史學を結合する方法によって補完されてはじめて正解を得るのである。



洪恩靈濟眞君の祭祀と儀禮書

酒井 規史（慶應義塾大學）

洪恩靈濟眞君とは、五代十國時代の呉國で權勢をふるった徐温の息子、徐知證と徐知諤の兄弟が神とされたものである。もともと福建を中心に信仰されていたが、永樂帝の病氣治療に靈驗があつたことをきっかけに、明朝も信仰を庇護するようになった。信仰の中心地であつた福建と遷都後の北京には祭祀の據點となる靈濟宮が置かれ、明朝が専門の人員を配置して大規模な祭祀が行われた。

その靈濟宮における祭祀については、『徐仙眞録』（『續道藏』所收）などに記録が残されており、儒教式の祭祀と道教式の祭祀を組み合わせたものであつたと考えられる。本発表では、まずこの洪恩靈濟眞君の祭祀について内容を検討し、その独特な形式について明らかにすることにした。

また、『正統道藏』洞玄部威儀類に収録されている、『洪恩靈濟眞君自然行道儀』をはじめとする一連の儀禮書も注目される。これらの儀禮書は、洪恩靈濟眞君に對する信仰が盛んになつた永樂帝の時期に述作された可能性が高く、遅くとも『正統道藏』の刊行までには成立していたのは間違いない。年代が不明な『正統道藏』所收の儀禮書が多く、編纂の時期が限定できる貴重な文献といえよう。

これらの儀禮書は明朝公認の儀禮における使用を念頭に編纂されたと考えられ、洪恩靈濟眞君という特定の神を祭祀するためのものではあるが、明代初期における標準的な道教儀禮の形式を反映していると推測される。同時期のも

のと思われるほかの儀禮書とも内容を對照しながら、明代初期における道教儀禮書の編纂についても見通しを述べてみたい。

明代の「修心」養生思想について——朱權『活人心』を中心にして

劉 青（京都大學大學院）

養生思想とその長生の諸技法は、先秦中國文化の中に發生し、育まれてきたが、とりわけ明（1368-1644）において世俗に廣く浸透した。社會經濟の安定と生活の向上とともに、士大夫階層にとどまらず、庶民の間でも、長壽延命法への關心が高まり、養生ブームが巻き起こった。印刷出版技術の向上に伴い、數多くの養生書が刊行された。

『活人心』は明初の文人朱權（378-1448）の養生著作である。内容は上卷の仙術と下卷の醫術で構成されている。「仙術」の部分には様々な養生術が紹介され、朱權の養生思想を表していると思われる。元明時代において、代表的な養生書『壽親養老新書』『修齡要旨』『遵生八箋』等の分析によつて、季節や居住環境を重視し、導引、服食、修身などの養生術を行うのが當時の主流となつてゐることがわかつた。しかし、本書は以上の養生術以外に、「修心」という養生思想が強調されており、「心」を重視する養生ブームの先驅けとなつた。

本書では病因は「すべて心から生ずる」「業は心から生ずる」「病は心から生じ、體に現れる」とされ、「人の心を治療すれば、病にはならない」と主張されている。その中で、「治心」の一節があり、心の平穩を保つことの重要性が強調されている。ほかの内容も、養生術を通じて元氣を固め、心の安定を保つことが最終目的だとみられる。

その後、朱權は「修心」の内容をさらに充實させ、次の養生著作『神隱』に「心が自ら清くすることは、神隱という」「潔心、潔身、潔世のことをとつて、篇目で分類し、編纂して本書になつた」と記している。

一方、『活人心』は朝鮮に傳來し、朝鮮の朱子學の大成者として知られる李退溪（1501－1570）の手に入った。李退溪は本書上卷の養生思想の部分に強く惹かれ、手抄している。本書の「修心」思想は李退溪の思想體系にも影響を及ぼしたと考えられる。

本研究は、まず先秦文獻および出土醫書に現れた「心」、「修心」、「病由心生」に関する内容の整理によって、先秦時代における「心」の概念、「心の修養」の内容および「心」と「病」の関連性を明らかにする。また、元明時代の養生書と比較しつつ、『活人心』に書かれた「修心」養生思想を素描し、明代における養生思想の展開を検討する。

伍守陽の著作活動と内丹法について —— 『仙佛合宗語録』を中心に

吉澤 明希（早稲田大學大學院）

伍守陽（號は沖虚子、1574～?）は、明代末期の南昌出身の仙道修行者であり、萬曆年間後半から崇禎年間にかけて、南京の道隱齋を據點としながら、門人達に内丹を中心とする修養法を説いたことで知られている。また彼はその思想や煉丹術の全容を、自著の『天仙正理』や『仙佛合宗』にまとめた。

伍守陽を巡る従來の研究では、清代光緒三十一年（1906）刊行の成都二仙庵本『重刊道藏輯要』畢集（第17卷）に収録されたテキスト（以下、輯要本と呼稱）が最も廣く参照されてきた。すなわち『仙佛合宗語録』、『天仙正理直論増註』、『天仙正理淺説』、『伍真人丹道九篇』と題された四篇である。しかしこれらの輯要本には書名や内容構成の點で、成立當初の意圖に沿わない改變の痕跡がある。具體的には、『伍真人丹道九篇』の序において伍守陽自身がこの著作を「仙佛合宗語録」と呼稱していることがすでに知られている。

現段階で筆者の目が及んでいる中で特徴的なテキストとしては、嘉慶四年（1799）に蘇州で成立した編者不詳の叢書『道德眞源』（東洋文庫所藏）に收められている『沖虚伍真人仙佛合宗語録』（以下、眞源本と呼稱）が挙げられる。その内容は『重刊道藏輯要』において『仙佛合宗語録』、『伍真人丹道九篇』と題された二篇を一篇にまとめたような構成をしており、『伍真人丹道九篇』が本來は『仙佛合宗語録』の一部であったことを示唆している。

加えて、眞源本の卷末には輯要本には見られない崇禎七年（1632）の自序が含まれている。輯要本『伍真人丹道九篇』

の成立は、冒頭の「伍真人丹道九篇縁起」の記述から崇禎十三年（1640）だと考えられてきた。しかし崇禎七年の自序の存在からは、伍守陽が従来想定されていたよりも早期からこの著作の執筆に着手し、ある程度 of 原稿を書き上げて世に出していたことが窺えるのである。

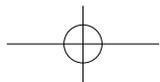
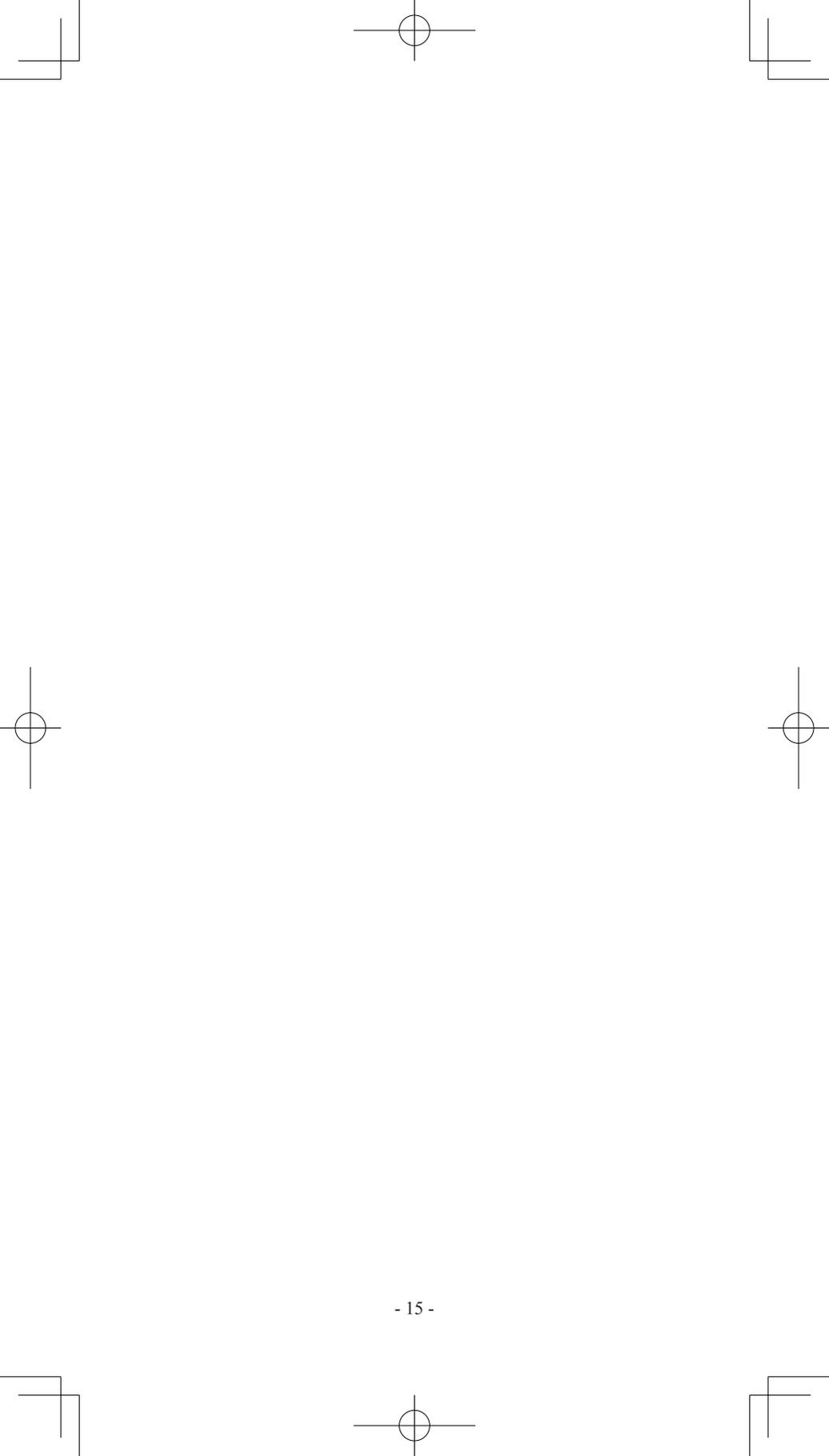
また注目すべきは、この真源本『仙佛合宗語録』には、輯要本において全篇に加えられていた作者の自註が缺けており、その他の文章も輯要本と主旨は同じながら表現に相違が見られる点である。このことから、伍守陽が自著を數回に渡って出版し、版を重ねるごとに記述や構成を改めていった可能性が考えられる。

本發表ではこのような各テキストの記述の比較考察を通し、伍守陽とその門派の修養理論の展開の一端を明らかにしていきたいと考える。

比較宗教學と道教…モデル形式と宗教類型

テリー・クリーマン（コロラド大學）

「道教とは何か」という問題に關して論争が續いている中で、新しいアプローチが有効ではないかと考え、比較宗教學のモデル形式と宗教類型に着目することとした。モデル形式とは、統一のかつ比較可能な方法により複数の宗教的傳統を調べるのに使われる、複数の基準から構成される標準的な組み合わせである。その諸基準は、ある一つの宗教的傳統が持っている鍵になるような重要な複数の特徴をあきらかにするために選ばれるが、それらの鍵になる特徴こそが、當該の宗教的傳統を、隣り合つて接している別の複数の宗教的傳統から區別し目立たせるものとなる。それでこれらの基準は集められ分析されるが、さらに分析結果を視覚化して應用し、表や圖に示すことで、どのように異なつた複数の宗教的傳統が相互に關係するのかを理解する助けとすることができる。最終的には、局地的な事象をその中に含みこみ、かつ將來的にさらに詳しく比較するのに資するような、いくつかの宗教類型を提起できると思う。この報告では、私は上述の方法論を紹介し、それを通じて中國宗教史における重要な複数の宗教集團について、私自身の分析を示し、またそれらの多様な宗教的傳統の價値を見きわめるために私が選んだ複数の基準について述べたい。このデータから、いくつかの結論を引き出したいと考える。結論の一つは、傳統中國において存在していた宗教類型にかかわる結論であり、もう一つは、道教に關連する複数の異なつた宗教的傳統を最も効果的に分類する方法にかかわる結論である（丸山宏譯）。



蝕の理論と道教の煉丹術——陳致虚の内丹思想再考

野村 英登（法政大學）

元の陳致虚の内丹思想については、これまで、女性を相手として金丹の煉成を行う雙修派と、一人での修行でそれを達成せんとする清修派と、どちらの立場なのか議論されてきた。本報告は二つの視点を導入して、陳致虚の内丹思想の位置づけに再考を迫ってみたい。

一つ目の視点は、陳致虚が自らの師である趙友欽の思想をどのように受容したかに注目することである。趙友欽には二つの著作が残されている。内丹法における三教一致を説く『仙佛同源』と、天體觀測や模型によるシミュレーションを行ってその結果をまとめた『革象新書』である。實のところ、趙友欽の内丹思想が雙修か清修を『仙佛同源』自体から明らかにすることは困難である。ただ興味深いことに、陳致虚は内丹法に関する自身の文章の中で『革象新書』を引用している。『太上洞玄靈寶無量度人上品妙經註』や『周易參同契分章注』において、陳致虚は日月の満ち欠けと蝕や歳差に関する引用を行っているのだ。こうした陳致虚による引用が内丹の文脈でどのような意味を持つのか検討してみたい。

二つ目の視点は、その趙友欽と陳致虚の内丹思想が後代にどのように理解されていたかを検討することである。ここでは『仙佛同源』が収録されている叢書の一つである『諸眞玄奥集成』において、その他の丹書の内容から『仙佛

『同源』を位置づけてみたい。例えば明の陸西星は、その著作『玄膚論』において、煉丹術を金丹の材料から天元・地元・人元の三種類に分けている。地元は大地から産出される鑛石を煉成する、いわゆる黄白術である。人元は人體の精氣から金丹を煉成する方法で、陸西星はこの人元の立場に立ち、巷間これが雙修派の根據とされている。ここで注目したいのは天元で、地元・人元の定義からすると、天元は天に由来する材料で金丹を煉成する丹法となる。陸西星は天元を説く丹書として『金液還丹印證圖』や『許真人石函記』を挙げているが、注目すべきことに、この兩書は『諸眞玄奧集成』に収録されているのだ。『仙佛同源』もまた天元の丹法に関わる書として理解されていたとすれば、趙友欽から陳致虚へ繼承された天文學的知識も無関係とは言えないのではないか。

つまり、趙友欽と陳致虚において天文學的知識と内丹法の實踐がどのような関係にあったのかを明らかにすること、彼らの内丹理論の特徴がいわゆる雙修派か清修派かを問うことと異なる次元にあることを論じてみたい。

第七十回道教學會大會記念講演
道教の天律・降筆・善書の儀禮的基盤

ヴァンサン・ゴサール（フランス高等研究院）

本講演では、近世の所謂道法の傳統が後期帝政期中國の宗教において果たした役割について論じる。すなわち、道法の儀禮的傳統において、天律、鬼律、および功過格が形成され、それが後の善書の基礎を形成したと考えられる。このような過程を通じて、道士の倫理は、普遍的な倫理へと次第に擴張していったのである。更に、宋元期の法師たちは降筆を行ったが、これも後に一般の人々の間で普遍化していった。

ヴァンサン・ゴサール（Vincent Goossaert, 高萬桑）：パリ高等研究院（EPHE, PSL, Paris）道教・中國宗教史學教授。現在は、後期帝政期の宗教文獻、降筆典籍、靈的實踐を中心に研究。主要著書 *Heavenly Masters. Two thousand years of the Daoist state*, University of Hawai'i Press & Chinese University Press (近期刊行)；*The Taoists of Peking, 1800-1949: A Social History of Urban Clerics*, Harvard University Press, 2007；*L'Interdit du bœuf en Chine: Agriculture, éthique et sacrifice*, Collège de France, Institut des Hautes Études Chinoises, 2005；*The Religious Question in Modern China*, The University of Chicago Press, 2012 (David A. Palmer の共著) 他多数。

講演は英語で行われます。和譯をスライドで投影する予定です。

会場アクセス



早稲田大学 戸山キャンパス

(8日：理事会・合同役員会、9日大会)

住所 162-8644 新宿区戸山 1-24-1

J R 山手線 高田馬場駅で学バス乗り換え

西武 新宿線 高田馬場駅で学バス乗り換え

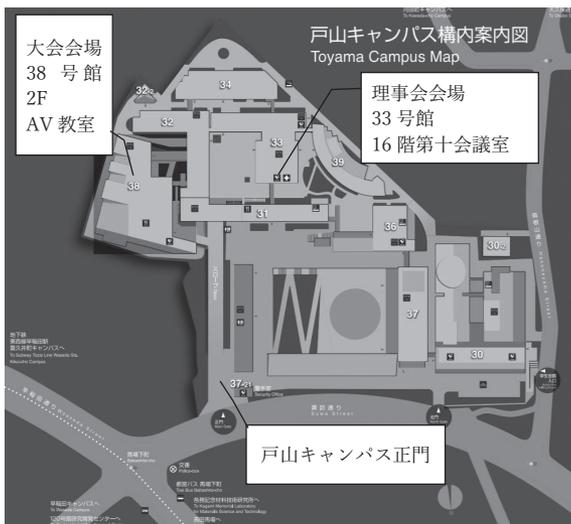
地下鉄 東京メトロ 東西線 早稲田駅から徒歩 5分

副都心線 西早稲田駅から徒歩 17分

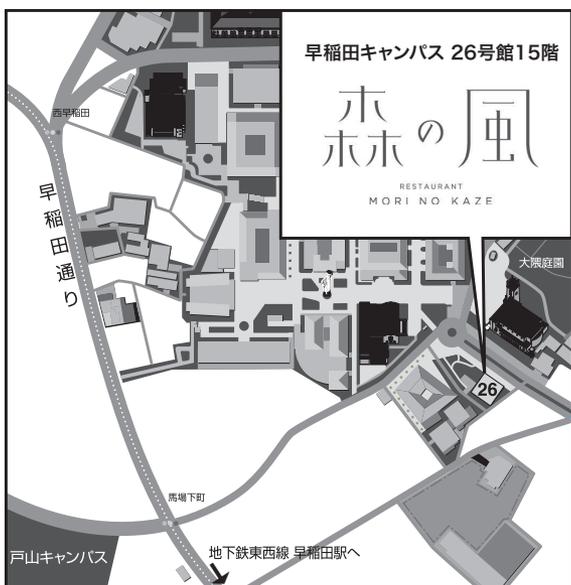
学バス 高田馬場駅 - 早大正門 (馬場下停留所下車)

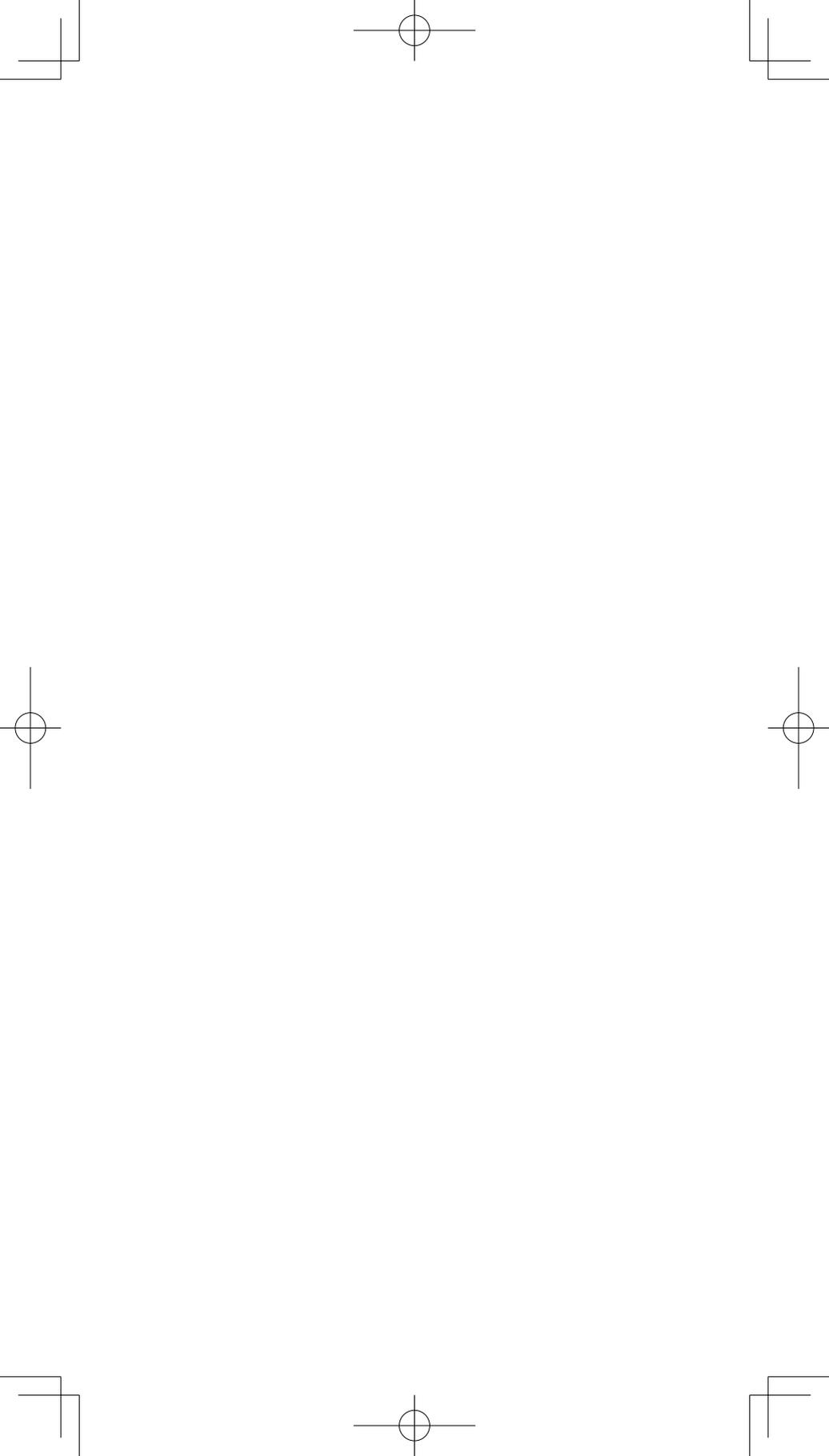
都電 荒川線 早稲田駅から徒歩 15分

理事会・合同役員會 33 號館 16 階第 10 會議室
 大會 38 號館 2 階 AV 教室（8 日・9 日戸山キャンパス）



懇親會會場





日本道教學會第七十回大會要項

發行日 令和元年九月二十日

發行者 日本道教學會 第七十回大會準備委員會 委員長 森由利亞

〒一六二―八六四四 新宿區戶山一―二四―一

早稻田大學文學學術院 東洋哲學研究室內

